

服のチカラ

世界を良い方向に変えていく

特集 難民とともに生きる



難民とともに 生きる

着の身着のまま、祖国を脱出する。
何百キロメートルも歩き、ときには危険な海を渡って、
見知らぬ国へと逃れていく難民たち。
今、世界各地で、何千万人という難民が
きわめて困難な状況に直面しています。
食料、水、住まい、医療、教育、仕事……
生きていくために最低限必要なものが
常に不足し、求められています。
ユニクロがつくり、お客様にお届けする服も、
防寒、防暑、衛生、人の尊厳を守るために
なくてはならないものの一つです。
衣料支援、その先にある自立支援。
お客様のご協力を得ながら、ユニクロが
これまでやってきたこと、これから取り組むこと。

世界を良い方向に変えていく

服のチカラ

15

表紙の写真：
ギリシャのレスボス島に
たどり着いたシリア難民
© UNHCR / A. McConnell

難民にはさまざまな人たちがいます

武力紛争などから逃れるため、国境を越えてくる難民には、さまざまな背景があります。人種や宗教、政治的信条などを理由に迫害を受ける難民もいます。大人もいれば、子どももいます。病人もいます。国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) が出会った人たち。



国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)
1950年に設立された国連の難民支援機関で、難民・避難民などを国際的に保護・支援し、難民問題の解決に努めている

シリア難民 | ジハン / 34歳

「子どもに教育を」、届かない母の願い

ジハンは、家事をするのも買い物をするのも、7歳の長男の手助けが欠かせません。彼女は目がほとんど見えません。シリアから、船で地中海を渡ったジハン一家。8時間かけてトルコに渡る予定が、45時間も船に揺られた末、ギリシヤに到着しました。命の保証のない脱出でしたが、家族の命を守るには、そうするしかなかったのです。シリアにいた頃、ジハンは公務員として働き、夫のアシュラフは大学に勤めていました。二人とも、子どもたちの教育に、たいへん熱心でした。難民となった今、ジハンは自分の左目が失明の危機にあるなかで、子どもたちの教育を、何よりも心配しています。「この状況を誰かが理解してくれるのではないかと、ここまで逃げてきたけれど、そんな人はほんの一握りだった」と、彼女は悲しそうに話します。



© UNHCR / A. D'Amato

シリア難民 | マハムード / 9歳

長く辛い日々の末に、たどり着いた、まっさらな未来

マハムードは家族とともにシリアからエジプトに逃れてきました。生活は困難をきわめましたが、当時の彼は地元の子もたちと遊ぶこともありましたが、しかしエジプトの情勢が悪化し、難民への風当たりが強くなると、彼ははじめを受けるように。学校どころか、外に出ることもままならなくなりました。息子の身を案じた父親が、イタリア行き密航船に乗船させたのですが、失敗。トラウマを抱えエジプトに戻って来た彼を、再びのはじめが待っていました。本当の転機は、スウェーデンへの移住許可が得られたことでした。南西部の小さな町に着いたのは、1月のこと。恐怖にさらされることなく、外に出て、初めての雪合戦を体験。約2年ぶりに、学校にも通い始めました。彼にとっては、これから始まるすべてがチャレンジであり、チャンスでもあるのです。

© UNHCR / S. Baldwin



ナイジェリア難民 | イブラヒム / 10歳

奪われた命の分まで、大切に生きる

ナイジェリア北東地域の村で、家族とともに暮らしていたイブラヒム。反乱軍によって村が襲われた際、目の前で父親を殺されたうえ、彼自身も頭をナイフで切りつけられ、穴に投げ捨てられました。ぐったりとした彼を見て、誰もが亡くなったと思いました。そのなかで、姉のラマだけは違いました。「弟は死んでなんかない、生きている」と。まわりから何をいわれても、必死で穴から救い出し、安全な場所へと運んだのです。ラマのいうとおり、彼は生きていました。病院で4カ月半におよぶ治療を受けた後、現在は母親や兄弟とともに、カメルーンのミナワオ難民キャンプで避難生活を送っています。学校に通い、英語の勉強が好きになり、親友もできました。放課後は、ラマや弟のルーカスと一緒にサッカーをします。ラマに救われた大切な命を、彼は懸命に生きています。

© UNHCR / H. Caux



服の会社だから、できること

私たちユニクロが、誇りと責任を持ってできることは何だろう。
難民を知り、難民に届け、難民とともに生きる。そのためにできること。
最初の一步は、ユニクロの服を届けることから始まりました。

UNIQLO ACTIVITY 1 2006年～

「全商品リサイクル活動」
服を届ける

お客様のもとで不要になった服を、ユニクロとジーユーの店舗で回収し、難民をはじめ、服を必要としている人に届ける活動を行っています。2001年にユニクロのフリースリサイクルからスタートし、2006年に回収対象を全商品に拡大。2010年にはジーユーでも活動を開始し、回収拠点は、16の国や地域の全店舗に広がっています（2015年11月現在）。回収した服のうち、もう着られない服（約10%）は、燃料としてリサイクル。まだ着られる服（約90%）は、必要な数量や種類、届けられるルートを確認し、難民などに寄贈しています。また従業員も難民キャンプなど現地に赴き、寄贈した服の配布状況を確認しているほか、人びとの生活や服に対する要望について、直接話を聞く活動もしています。これまでに59の国や地域で、約1,632万点の服を届けました（2015年8月末現在）。

「全商品リサイクル活動」における寄贈点数



1,632 万点

2015年8月末現在

UNIQLO ACTIVITY 2 2011年～

「難民インターンシップ」
ともに働く

ユニクロは、日本で難民認定を受け、定住が認められた難民とその家族を対象に、就業体験の場を提供し、自立を支援しています。3～6カ月間、店舗でインターンシップの機会を提供。希望者には、店舗スタッフとして本採用の道も開かれています。2015年11月現在、インターンや正社員などさまざまな雇用形態で合計13名が勤務しています。ユニクロは難民を特別な存在としてではなく、一緒に働く仲間として考えています。ほかの従業員と同じように、それぞれが個性を活かし、希望を持って、活躍してほしいと願っています。



写真は、
ミャンマー出身のタラボさん。
最初は日本語にも
仕事内容にも不安があったが、
店長やまわりのスタッフが
サポートしてくれたという。
インターンシップを経て、
現在は正社員として、
働いている

UNIQLO ACTIVITY 3 2013年～

「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」
知り・学び・体験する

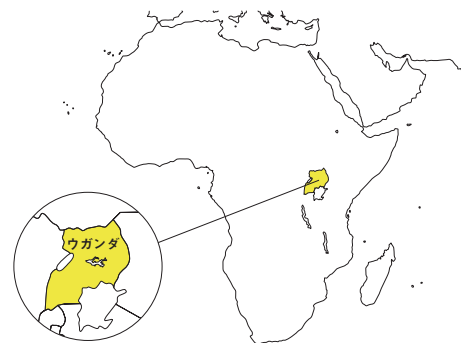
子どもたちに、難民問題に関心をもってもらうため、教育機関と協働したプロジェクトを日本全国で行っています。2009年より、従業員が講師となって出張授業を実施する活動を開始。2013年からは本格的に取り組む全社プロジェクトとして展開しています。授業ではまず、難民の避難生活や服の役割について学びます。その後、子どもたちが主体となって、服の回収活動を体験。学習の締めくくりには、ユニクロが難民キャンプを訪れ寄贈している様子をまとめたフォトレポートを作成し、子どもたちに届けています。2015年度は238校で実施し、約26,000名が参加しました。



プロジェクトに
参加できるのは日本国内の
小学校・中学校・高等学校で、
応募はユニクロホームページより、
学校の先生のみ可能。
2016年度の実施校数や
応募期間など詳細は
ホームページにて告知予定
www.uniqlo.com/jp/csr/school/

「衣料支援」最新レポート： ウガンダ共和国へ

国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) によって「3大緊急支援対象」とされている南スーダン共和国からの難民流入など、ウガンダが受け入れる難民は、約50万人。10月初旬、届けた服がどのように活用されているかを知るために、私たちユニクロはウガンダを訪問しました。



5つの国と国境を接するウガンダ。南スーダンやコンゴ民主共和国など、近隣諸国から絶えず難民が流れ込んでおり、その総数は50万人にのぼります。かつてはウガンダも、難民を流出させた過去があり、その経験も踏まえた難民支援が、政府主導で行われています。

今回訪れたのは、キリヤンドンゴ難民居住区。ここに住む難民の大半は、内戦で荒廃した南スーダンから逃れてきた人びとです。ほかの多くの難民キャンプでは、地域住民との衝突を避けるために、敷地は柵で囲まれ移動も制限されているのですが、ここでは柵もなく、難民も地域住民も自由に行き来しています。学校や病院などで受けられるサービスにも、差がありません。さまざまな難民キャンプを訪問してきましたが、ここまで地域との共存が進んでいる

のは、非常に珍しいケースです。その背景には、元々住んでいる地域住民と、難民の大半を占める南スーダン出身者では、宗教と言語に共通点があることが影響しているように思います。緑を携えた赤土の大地を、誰もが規制なく行き交う様子に、のどかな印象を受けました。

最初に話を聞いたロームさん一家（写真下）。ユニクロの服を、家族みんなで着て見せてくれました。スーダン（現在の南スーダン）で内戦が勃発した際、一番近い国を目指して、歩いて避難してきました。家も仕事も失ったところから、UNHCRより土地と資材の提供を受け、自ら家を建て、畑を耕し、市場で野菜を売って生計の足しにしています。ここになれば、命の危険こそないものの、いつまで避難生活を続ければ良いのか、焦燥感を覚えない日はありま



せん。ロームさんが何よりも願うのは、自立をして、かつての生活に少しでも近づくこと。避難生活に疲弊するなか、ユニクロから服が支援されると聞き、とても楽しみにしていたそうです。

「生活するのがやっとで、服を買う余裕がないんだ。でも朝晩は寒いし、子どもにもちゃんと服を着せてあげたい。だからユニクロから服が届くと聞いたとき、すごくハッピーな気持ちになったよ」。

15歳のアクエロさん（写真下）も、ユニクロの服を、着こなしていました。南スーダンから逃れ、妹二人と暮らしています。今一番ほしいものは、中学校の学費だといいます。UNHCRからの支援で、最低限の暮らしはできて、両親のいない彼女には、学費を手に入れるすべがありません。亡くなった母親の話になると、唇を震わせ心を閉ざしてしまうアクエ

ロさん。それでも、絵描きやナースになりたいという夢については、積極的に話してくれます。黄色のポロシャツに映える、生き生きとした表情。そんな彼女にカメラを向けると、はにかみながらも微笑みを返してくれました。

困難に屈せず、懸命に生きる難民の人びと。私たちが届けた服は、彼らのもとで、確かに役立てられていました。早速着替えてカメラの前でポーズを決める人、服を受け取りはしゃぐ子ども、「服のおかげで安心して学校に送り出せる」と、嬉しそうに話す母親。その様子に、活動の意義を実感した反面、希望どおりのサイズを渡せなかった、子ども服が不足しているなど、改善点もまだまだあります。現地での体験をもとに、私たちにできることを改めて考え、次の活動につないでいきます。



私の今の夢は、祖国ミャンマーにユニクロのお店を開くこと

政治的な活動への参加による圧力を避けるため、チンハウレンさんは2007年、祖国ミャンマーを離れて日本に渡り、難民認定を受けました。さまざまな試練を乗り越え、ユニクロの店舗で働くようになって2年。今や、日本人スタッフの相談にももの、頼もしく積極的な正社員です。

大学を卒業する2007年に、政治的な活動に参加したことがきっかけで、身のまわりに圧力を感じるようになり、日本にやって来ることになりました。難民申請をして、難民認定を受けるまで数年かかりました。アルバイトを続けながら日本語の勉強をしているとき、ユニクロの「難民インターンシップ」の募集があることを知ったんです。応募して、このアトレ亀戸店で仕事をするのが決まりました。もう2年が経つんですね。今はユニクロの正社員として働いています。

最初は、仕事上の専門用語がわからなくて、何をしたらいいのかもわからず、泣きたい気持ちでした。一人で悩んでいたら、「あなたは同じスタッフとして働いている仲間なんだから、自分だけ難民だとは考えなくていいよ」と店長に声をかけられて、前向きな気持ちに切り替わりました。

ユニクロの店舗での働き方は、決められた役割分担をこなせばいいというものではないんですね。接客もレジもディスプレイも裾直しも、誰もがひとりおこなえるようになって、お互いにフォローし合いながら、お店をまわしています。

新しいスタッフが入ってくると、自分のできることのすべてを伝えます。慣れてきてしっかり正確にできるようになれば、私もうれしい。スタッフもうれしい。お客様にも喜んでいただけます。

私も最初はそうでしたけれど、間違えることはあるんです。まわりがそれに気づいても「これ間違ってますよ」ってあまりいいたくないでしょう（笑）。でもスタッフに伝えないままだと永遠に直らない。

気がついたときに誰かが教えないと、また同じ間違いを繰り返します。誰に責任があるかといえば、気がついて伝えなかった人。気づいたらその瞬間にす

ぐに対応しないと、後まわしになって忘れてます。その場ですぐにやらないとダメです。2年間働いて、そういうことが少しずつわかってきたかな。

難民の問題は、だんだんと大きくなってます。一番辛い思いをするのは、子どもたちです。明日どうなるか、わからない。未来が見えないままなのは、何より恐ろしいことです。

これから日本で難民の受け入れが進むとしたら、難民には「日本語をしっかりと勉強してください」と伝えたいですね。受け入れてもらうには、日本の習慣や生活のスタイルを学んで、吸収する努力が大事だと思います。

たとえば、日本の挨拶は「こんにちは」「おはようございます」だけど、ミャンマーでは「ご飯食べた?」。年上の女性には「〇〇お姉さん」と「お姉さん」をつけます。年下だと「ハウレン」と呼び捨て。自分の親と同世代の年上の方は、親族じゃなくても「おじさん」「おばさん」。日本で年上の人を「おばさん」と呼んだらたいへん（笑）。返事の「はい」はミャンマーでは「ホウ、ホウ、ホウ」と繰り返します。日本では「はい」は一回でいいって（笑）。そういう習慣の違いは、相手からいわれないとわかりませんね。

母とは毎日のようにメールのやりとりをしています。海外ニュースもSNSなどでチェックしています。今はミャンマーの総選挙に注目しています。

両親や兄妹と離れて、今、日本に住んでいるのは私だけです。やっぱりいつか家族全員がいっしょになれるといいですけど、まだまだ難しいですね。

将来はミャンマーにユニクロのお店を開きたいんです。私の出身地は冬は寒いから、ユニクロの服がぴったりだと思うんですよ。



難民の子どもの教育にとって 服はとても大事なんです

東アフリカのスーダンに生まれるも、内戦から逃れた難民キャンプで家族は散り散りに。少年兵として生き延びたドウエイニーさんは、難民として米国に移住し、やがて俳優、モデルとして活躍。2014年には難民の日常を描いた映画「グッド・ライ」に出演、2015年からは国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 親善大使に。活動の一環で来日した彼に、話を伺いました。

8歳か9歳の頃、スーダンは内戦がひどくなるいっぽうでした。エチオピアまで400キロメートルのところにある故郷の村から、家族と歩いて国境を越え、さらに450キロメートルほど入った難民キャンプに逃れました。キャンプでの暮らしが4年を過ぎた頃、今度はエチオピアで内戦が始まりました。戦火の混乱のなか、家族は散り散りになってしまいました。

裸足のままスーダンに歩いて戻ろうとしたものの、眠ることも食べることもできない。諦めかけたとき、軍の施設にたどり着きました。ここには水も、食料も、眠る場所もある。あのとき、少年兵になる以外、生き延びる手段はありませんでした。

銃を持たされ戦闘員になりました。その日々が耐えられなくなり、14歳のときに脱走しました。エチオピアを経由して、ケニアの難民キャンプを目指しました。難民としてアメリカに向かうことが決まったのは1994年、16歳のときでした。

私が出演した映画「グッド・ライ〜いちばん優しい嘘〜」(2014年米国映画)は、スーダン内戦で親と生き別れた難民が、アメリカで暮らし、働くとき、どんな悲喜劇が生まれるかを描いています。監督やプロデューサーが私たち難民出身の役者の経験を取材して活かしてくれたのは、ありがたかったです。

映画は受け入れ国側の困惑と、難民側の困惑を等しく描いています。自分の経験でいえば、生き延びることで精一杯だったアフリカでの日々と比べれば、異文化のもとで暮らす困難など、たいしたことではありません。新天地で与えられた機会を活かし、ひたすら学べばいい。異なる文化に悩むばかりではなく、楽しむ姿勢も大事なのだと思います。

映画に出てくるシーンで、スーダンで生まれ育っ

た男同士が手をつないで歩くのを、アメリカ人が奇異な目で見る場面があります。お互いを大事に思う同士が手をつなぎ合うのは、スーダンでは自然なふるまいです。ところがアメリカで同じことをすると別の意味が生じる。手をつなぐのはお互いを敬う現れで、その習慣を恥じることはありません。ただ、誤解されると知ってなお、あえて習慣を変えず、意地をはる必要もないのではと思います。

故郷への思いは今も変わりません。高地にあるエチオピアに雨が降ると、生まれ育ったスーダンにはミネラル豊かな水が湧くんですね。土地は肥沃で、農作物は何でも育ちます。ナイル川で魚釣りをしたり、泳いだりもしました。内戦さえなければ、本当に美しく、豊かな故郷です。もしも平和が戻ったら、畑を耕して、今も母国にいる家族兄弟に、農作物をたくさん食べてもらいたい。

今はUNHCRの親善大使として東アフリカの地域でさまざまな活動を行っています。特に力を入れて取り組んでいるのは子どもの問題、教育の問題です。難民キャンプの教育環境を整えて、自分たちの未来のために勉強してもらいたいんです。

自尊心を持って教育を受けるためには、じつは服がとても大事です。ちゃんとした服がないから学校に行けない、行きたくない、というケースが多い。服にはさまざまな役割がありますが、子どもの教育にとっても、欠かせない大事なものです。

ユニクロが難民支援のために服の提供を行っている企業だとは、つい先日まで知りませんでした。このTシャツ、じつはユニクロです。たいへん誇らしく思って着ています。これからもユニクロのリサイクル活動に心から期待しています。





難民問題に対して 私たちができること

今、世界各地では、紛争や迫害によって、故郷を離れざるを得ない難民や国内避難民があふれています。その数は世界全体で約6,000万人におよぶとされ、今後さらに増えてゆく可能性があります。これは今までに世界が経験したことのない、きわめて深刻で、緊急な事態です。

難民には、家族を失った人、家を失った人、職業を失った人がいます。勉強を続けることが不可能になった学生もいます。心や体が傷ついた人、病気に苦しむ人がいます。自分のおかれた状況を理解できないまま、未来の見えない環境におかれた幼い子どもたちがいます。

ユニクロなどを展開するファーストリテイリングは、服をつくり、服を販売する日々の活動をとおして、「服を変え、常識を変え、世界を変えていく」ことを目指しています。また、グローバル企業には、難民問題の最新の状況を把握したうえで、自分たちにできることは何かを考え、支援を実行する責任があります。

深刻な現状を受け、服を難民へ届ける衣料支援「全商品リサイクル活動」を拡大し、世界16カ国・地域の全店舗で、ユニクロおよびジーユーの服を回収するプロジェクト「1000万着のHELP」を実施しています。全世界のファーストリテイリンググループ従業員も、不要になった衣料の提供に参加しています。

さらに、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) とのグローバルパートナーシップを一層強化しました。また、難民問題を教育の現場で伝え学んでもらう地道な啓発活動をさらに拡大させます。難民の自立を支援する「難民インターンシップ」も継続し、難民とともに生きる環境づくりに力を入れていきます。

活動にゴールはありません。もしあるとすれば、難民が一人もいない世界の実現するその日まで——。これからも引き続き、皆さまのご理解とご協力、ご支援を、心よりお願いいたします。

もう着ないユニクロの服、 ありませんか？

あなたのその服が、難民のもとに届けられます。
店内のこの箱が、難民支援の入り口、第一歩です。



●営業時間内であればいつでもお預かりしています ●店頭のリサイクルボックスに入れていただくか、スタッフにお声がけください ●ユニクロ・ジーユーで販売した全商品が対象です ●良い状態でお届けするために、お洗濯のうえ、お持ちください ●衣服のポケットなどに入っていた物に関しては、責任を負いかねます ●破れ、しみなどがあり、支援衣料として適さない場合でも回収させていただき、燃料化して最後まで活かします

UNI
QLO



1000万着の

HELP

今世界は、かつてないほど大勢の難民であふれています。

安全な新しい場を求めて、

故郷を捨てざるを得ない人々が何千万人もいます。

ユニクロは、国連難民高等弁務官事務所

(UNHCR The UN Refugee Agency)と協力し、

1000万着の服を世界中の難民の方々に届ける活動をしています。

ご不要になったユニクロの服は、ぜひ店頭のボックスへ。

あなたの1着には、世界を変える力があるのです。

どうか、ご協力をお願いします。

www.uniqlo.com/jp/csr/
www.unhcr.or.jp/